慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應教育と半沢直樹
Sub Title	
Author	福澤, 克雄(Fukuzawa, Katsuo)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2014
Jtitle	人間教育講座 : 社会を知る自分を知る自分を育てる (2014.) ,p.44- 76
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20140000-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドラマ演出家・映画監督

福澤　克雄

ふくざわ・かつお　一九六四年東京都生まれ。慶應義塾創立者・福澤諭吉の玄孫。幼稚舎から大学まで慶應義塾に学んだ生粋の慶應ボーイで、一九八七年法学部卒。在学中、ラグビー選手として活躍。一九八五年度全国大学選手権優勝、さらに社会人チャンピオンを破って日本選手権優勝。一九〇センチメートル、一〇〇キログラムと日本人離れした体格を持ち、日本代表A（二三歳以下日本代表）にも選ばれたが、大学卒業を機にラグビーと縁を切る。卒業後、富士フィルムを経て、一九八九年TBSテレビ入社。二〇〇三年度『さとうきび畑の唄』で文化庁芸術祭大賞受賞。二〇一三年、企画・監督を務めた『半沢直樹』が平成ドラマ一位の視聴率を獲得。社会現象を引き起こして、二〇一四年東京ドラマアワード監督賞受賞。その他、主な演出作品に『3年B組金八先生』シリーズ、『砂の器』、『華麗なる一族』、『南極大陸』、『ルーズヴェルト・ゲーム』など。

一〇年間につくってきた代表的作品

福澤です。今日はこんなにたくさんのみなさんに集まっていただいて、本当に幸せです。

私は今、とても不思議に思っています。何が不思議か。学生時代の私は、こんな時間に開かれる講演は絶対に聞きに来ませんでした（会場から笑い）。当時の私はラグビー馬鹿です。今のラグビー部とは少し違って練習しかしない、そんなラグビー部にいまして、優勝することもできました。そんなラグビー馬鹿だった私が何とか卒業して、その後、どうして『半沢直樹』のようなテレビドラマを撮るようになったのか――今日はそういうお話をさせていただきたいと思います。私の今までの人生について、ちょっと聞いていただければ、みなさんも希望を持つことができると思います。

最初に、私がこの一〇年ぐらいに手がけた作品を見ていただこうと思います。『半沢直樹』しかつくっていないようなことをよく言われるのですが、実はいろいろとやってきているんです。ここ一〇年監督をしたドラマと映画を、うちの助監督が八分程度の動画にまとめたので、まずは見てみてください。

●動画紹介

- さとうきび畑の唄（二〇〇三年）（テレビ五〇周年記念ドラマ　特別企画）
- 砂の器（二〇〇四年）
- 華麗なる一族（二〇〇七年、プロデューサー兼任）（ＴＢＳ開局五五周年記念ドラマ）
- 私は貝になりたい（映画・二〇〇八年一一月二二日公開、監督）

・MR．BRAIN（二〇〇九年）
・九九年の愛～JAPANESE AMERICANS～（二〇一〇年）（TBS開局六〇周年記念特別企画五夜連続ドラマ）
・南極大陸（二〇一一年）（TBS開局六〇周年記念ドラマ）
・半沢直樹（二〇一三年）
・LEADERSリーダーズ（二〇一四年））（TOYOTA自動車全面協力　二夜連続大型ドラマ）
・ルーズヴェルト・ゲーム（二〇一四年）

これらが、私が約一〇年間やってきた作品です。いろいろやってきていて、決して『半沢直樹』だけではないことが分かっていただけたと思います。ただ、『南極大陸』や『華麗なる一族』と、『半沢直樹』とではわけが違うんですね。みなさんにとっては一緒だと思いますが、僕の取り組み方が全然違ったわけです。これについては後ほどお話ししようと思います。

どこからお話ししたらいいか。とにかく、『半沢直樹』ができたのも、こうした映画やテレビドラマができたのも、本当に慶應教育のおかげだと思っているんです。そのお話をしたいと思います。

人生を決めた幼稚舎での教育

私は福澤克雄と申しまして、何と言ってもラッキーだったのは、福澤諭吉先生の孫の孫として生まれたことですね(笑)。なぜかと申しますと、慶應幼稚舎に入れたことです。まあ、大めに見てくれたのでしょ

う、どう考えてもそうです。私には弟がいますが、これが馬鹿でねえ、福澤家の馬鹿兄弟と呼ばれていました。私のおじのひとりは三菱地所の会長をしていまして、慶應の評議員会の議長もした、とても偉い人です。このおじに「おまえたちはちゃんと勉強しろ！」と、いつも怒られていました。そのたびに「はい！」と言いながらも、本当にぼけっとしていたことをよく覚えています。

当時の私は幼稚舎がいい学校なのかどうかも分かりませんでした。近所の仲良しの友だちたちが不動小学校というところに通うのに、私だけはバスを乗り継いで幼稚舎に通わなければいけない。おふくろに「どうして僕だけ違う学校に行くんだ」って文句を言ったら、すごい剣幕で怒られたのをよく覚えています。幼稚舎出身の学生さん、いらっしゃいますか？（会場からちらほら手が挙がる）少ないですね。でも何人かいますね。では慶應幼稚舎の話をちょっとしましょう。

慶應幼稚舎が、私の人生の決め手だったのです。私の担任の先生は中川先生と言いまして、勉強しろと、ひと言も言わない先生でした。運動しろとは言うんですが、勉強しろとは言わない。本当にひと言も言わない先生でした。幼稚舎では一年生から六年生まで一貫して同じ先生が受け持つので、クラス替えがありません。先生は私がいたクラスを見て、この子たちは運動させてみようと思ったのだと思います。あまりにも勉強しろと言わないので、こちらも勉強しませんでした。

「運動しろ」のほかに、小学校一年生からずっと言われたことがひとつありました。それは、好きで好きでたまらない仕事を早く見つけなさいということです。今でこそ小学校一年生に対してそういう教え方をするのはちょっとどうかと思ったりしますが、当時はなんだかよく分からずにとにかく聞いていました。

三年生ぐらいになると、中川先生は「おまえたちは勉強が嫌いだろう。でもね、勉強のために勉強をしているわけではなくて、仕事をするために勉強するんだからね」と教えてくれました。当時は先生が何を言っているのか、よくわかりませんでしたが……。

「給料の高い低いに関係ありません。仕事を持っていない。プライドを持っていない。プライドをもってできる仕事をもっているかいないかで、人生の送り方が本当に違うわけです。仕事がなくなると、自暴自棄になって、プライドもなくなって、なんのために生きているのかわからなくなる。そのためにやっぱり仕事をしていることが大切なわけです。しかし、仕事はきつい、本当にきつい。いろいろなイヤなこともあります。でも好きだったら続けられる。今、そんな仕事の目標を見つけろとは言わないけれど、いつかは好きで好きでたまらない仕事を見つけなさい」と、中川先生に六年間言われ続けて、幼稚舎を卒業しました。

普通部時代の衝撃的な映画との出会い

幼稚舎ではぼけっとしていて、漢字のテストで〇点を取ったりしながらも、どうにかギリギリ普通部に行きました。普通部に進むと、外からすごい人たちが入ってくるんですよ。幼稚舎出身の方は分かりますよね。幼稚舎の全然勉強してない連中が、普通部の偏差値七〇以上のすごく勉強のできるやつと一緒にさせられるんです。こっちはそれこそ地獄です。「ねえ、君、この漢字、書ける？」って言った字が、外から来たやつらは全部書けるんですよ。本当にびっくりしちゃいました。ここに至って「えらいこと

になった。こんな連中とこれから一緒に勉強をするのか。ああ、どうして勉強しなかったのか」と、たいてい幼稚舎生は思うわけです。また、普通部の先生も意地悪だから、幼稚舎生を目の敵にして、外から入って来た生徒をメインに授業を進めて行くので、こちらはついていけない（笑）。私はどうにかギリギリセーフで進級、卒業しましたが、うちの弟は普通部で落第しました。

私は、幼稚舎時代から映画が好きで、ずっとよく見ていました。幼稚舎の中川先生は、映画の感想文だけにはいい点数をつけてくれて、大した文章じゃないんだけれど、今思うと嬉しかったです。だから私も、映画の感想文に関してだけは自信を持っていて、映画を見ることは続けようと思っていました。

普通部の二年になったときに『スター・ウォーズ』の第一作が公開されて見に行きました。今で言えばエピソードⅣです。京橋にあった、今はもうないテアトル東京という映画館で見たら、もう、感動しちゃって、そのときに初めて「これだ！　自分の人生、これに賭けよう！」と思いました。映画監督になろうと誓ったんです。当時はまだラグビーをやっていて、翌日もちょうど練習がなかったので、弁当箱を持って再び映画館に行き、朝から晩まで見たことを覚えています。そこで、「自分の好きで好きでたまらない仕事はたぶんこれだろう、これをやろう！」と心に誓ったんです。

ラグビーを続けて高校落第

そこからストレートで映画監督まで行ったらかっこいいのですが、そうはいきません。そこからさらにいろいろな紆余曲折があって、実はたいへんでした。

映画だけは見続けながら、ぎりぎりの成績で塾高に入りました。今度は外から、英単語を全部暗記しているような人たちが入って来ていて、もうついていけませんでした。見事に高校一年で落第しました。

私は塾高に入ってもラグビーを続けたんですね。中学で優勝なんかしたりしていたので、慶應高校のラグビー部からも誘いを受けて、勢いよく入部したのはいいのですが、一学期の中間テストで一三点という成績をとってしまいました。

中間テスト後に、担任の先生が配った「46／47」と書いた紙を私の親が見て、「先生、これは何ですか？」と聞いたら、「あなたの息子さんは四七人中、四六番です」と言われました。さらに、先生と親の面談の時には、先生から「あなたの息子さんは学力がない。ついていけない。絶対に落第します！」と言い渡されました。「ラグビー部はやめたほうがいい。とにかくやめて勉強してください。二年連続で落第するとオッポリ（おっ放り出す、退学になる）ですよ」と言われたのですが、うちの母親は「でも、ちょっと勉強できるのと、ラグビーができるのとだったら、社会に出たらラグビーのほうが使えるんじゃないかと思うんですよ」と言っちゃったんですね。福澤先生の子孫ですから、うちの母親はちょっと上から目線なんですかね（笑）。先生はかちんと来て、「おたくのお子さんなんて、中学のときにはいい選手だったかもしれませんが、高校レベルになったら全国的には大したことないですよ。慶應高校は全国大会に出ないし、福澤家の子孫ということもあるし、とにかく今は勉強してください」と言うのに、母親は「いや、うちはラグビーを続けさせます」と言い切って、先生とケンカしてしまったわけです。それからちょっとにらまれて、点数が悪くて見事に落第してしまいました。

「ああ、落第しちゃった。次の年は頑張ろう」と思って、二回目はどうにか点数を取ることができ

ました。でも落第すると、いろいろなことを考えるわけですよ。みなさんもそうだと思いますが、高校生ぐらいになると人生のことを考えるでしょう？　私も考えました。

このままラグビーをやっていてもしようがないな、人生どうするんだろう、自分はやっぱり映画監督になりたいと思って、映画監督になる道を調べました。当時は今のようにインターネットがないので、いろいろな本などを読んで調べていくと、映画監督ってろくな学校を出てないんです。良くても日大芸術学部、もしくは専門学校などの出身なので、じゃあ、そういう学校を出ないと、映画監督になれないのかと思ってしまいました。昔、黒澤明監督の時代の頃には、映画会社が監督を社員として雇っていましたが、今はそんなことはなくて、みんなフリーです。今は、日大芸術学部や専門学校を出て、フリーになり、助監督になり、チャンスがあれば監督になるというシステムなんです。

もう、それしかないかと思い、考えました。慶應義塾大学に通いながら専門学校に行こうかなと思っていたわけです。そういう人生を歩もうと思っていたわけです。そして映画監督になるつもりでした。

ラグビーで高校日本一に

ただ、大切にしていたラグビーでも、やってきた証をつくりたい。それは全国大会に出るか、高校日本代表になるかです。そのふたつのうちひとつをクリアできたら、堂々とラグビーをやっていたと言えることになると思って、本当に一生懸命に練習していました。

全国大会を本当に一生懸命に狙ったのですが、決勝で負けて、翌年は準決勝で負けました。当時、相模台工業という確実に強い学校があって、全国大会に出ると、優勝か、準決勝か、ベスト4には入るというぐらいでした。今なら桐蔭学園でしょうか。そんな強い学校が神奈川県内にあるんです。この相模台工業には負けに負け続けて、一〇対〇から僅差までは追いつくんだけれど、結局、勝ち越せなくて負けました。

私個人としては、高校の神奈川代表に選ばれ、関東代表に選ばれ、高校日本代表の第一次合宿に呼ばれて、このまま頑張れば、ラグビーの高校日本代表になれると思っていました。高校日本代表に選ばれると、どこの大学でも、慶應以外の大学でもどこでも推薦で入学できます。ラグビー選手のフリーパスみたいなもので、特権です。慶應義塾高校から選ばれたらかっこいいし、母親に「あんたのお子さんは全国に出れば大したことない」と言ったあの先生にも認めさせてやろうと思い、がんばりました。

そしてとうとう選ばれました。慶應義塾高校の体育館で、その担任の先生と全生徒の前で表彰され、これで切りよく、堂々とラグビーがやめられると思ったのですが、そうなると慶應義塾大学のラグビー部が黙っていません（笑）。附属高校から高校代表が出たんですから、絶対に引っ張り上げるに決まっています。自宅まで来て親にも勧誘に来るし、親も「ほら、言った通りでしょう？　あなたはラグビーをやっていてよかったでしょう？」と絶対に続けさせる気でいました。だからいやだと言えなかったんですよ。映画監督になりたいなんて。勉強ができない、馬鹿で、ラグビーしかやっていない私が言えますか。黒澤明みたいになりたいなんて、とてもじゃないけれど恥ずかしく言えなくて、黙っていました。

本当は映画の専門学校に行きたいんだけどなあと思いながら、親もすごく期待しているし、慶應義塾

大学ラグビー部からもお呼びがかかっている。今はＡＯ入試などいろいろなものがありますが、当時の慶應義塾大学は、受験しなければ、絶対に外から入れませんでした。つまり、すごくいい高校の優秀な成績がいい選手でも、受験しなければ慶應には入れないというシステムでした。だから私が慶應義塾大学に入学するとすれば内部進学で入るしかなかったし、なかなか外部から優秀な選手も集まりませんでした。

辛かった大学ラグビー部

高校日本代表に選ばれたものだから、周囲からはよいしょされ、ちやほやされました。あの時、「国立競技場は早慶戦で満員だし、長い人生のうち大学の４年間しかできないから、やってみるか！」と思って、大学のラグビー部に入ってしまったのが大間違いでした。ひどいめにあいました（笑）。

とにかく授業なんか受けられません。朝から晩まで奴隷のような練習です。一年生は奴隷だし、Ａチームという一、二軍に入ったら、日吉の汚い合宿所に入らなければいけないし、四年間はまるで軍隊生活でした。三田キャンパスに授業に行ったことなんてありません。いや、二、三回は行ったかな（笑）。あとは三田に行くのは二郎ラーメンを食べるときぐらいでした。

毎日とにかく練習に次ぐ練習で、どうなってしまったかというと、鬱病になりました。当時はよく分かっていなかったのですが、今、思うと、鬱病でしたね。たとえば、クロスカントリーという、日吉キャンパスから下田のグラウンドのほうまで走る練習がありました。今はもうやっていないかもしれま

せん。それがもういやでいやで、自分からタクシーに「轢いてくれ」って突っ込んでいこうとしたんですね。そういうふうに思うのですが、えーいと突っ込むものの、タクシーに足の先だけをひかれただけだったりしました。まわりにはノミの心臓と言われていました（笑）。どうしてラグビーを続けていたかというと、やめますという勇気がなかったからです。そういう中途半端な大学時代でした。

ラグビー部には当時、一二〇人ぐらい部員がいましたが、部員のほとんどは試合に出られません。四年間、あの黒黄のジャージを一回も着ることができず、秩父宮ラグビー場の試合にも出ることができずに卒業して行く部員がたくさんいるなかで、そいつらと同じような練習をしているのに、いや、私は特別きつい練習をさせられましたが、それでも試合に出られない部員を見ると、自分は幸せだと思ったわけです。だから、とにかくそいつらのためにも、試合では頑張ろう。もうラグビーを楽しもうなんて思わず、試合に勝とうという気持ちだけで頑張っていました。

大学選手権で優勝して、さらに日本選手権で、社会人で優勝したトヨタ自動車と戦って勝ってしまいました。「十数年、大学チャンピオンチームは社会人チャンピオンチームに一度も勝っていないので、まさか勝てるわけがない」という気持ちで最初は試合をやっていたのですが、やっているうちに「あれ、たいしたことないな」と思い、最終的には勝ってしまったんですよ。それが人生で本当に大きな事件でした。

就活か？　ラグビー日本代表の遠征試合か？

大学代表にも選ばれたし、日本選手権にも勝ってしまった。さあどうしよと思った私は、東宝にいる

慶應ラグビーの先輩のところに話を聞きに行きました。そして、「ラグビーをやっていたし、どう見ても文科系には見えないので、恥ずかしくて言えないけれど、実は映画監督になりたいんです」と言ったら、やっぱり「おまえが映画監督かよ」と笑われました。でも「まあ、わかる、わかる」と先輩は言ってくれたんですね。「わかるけれど、映画監督になる道はないな。まずはとにかくテレビ局に入れ。テレビ局が映画をつくる時代がこれから絶対に来るし、画面のサイズは違うけれど、テレビドラマと映画とではやっていることは同じだ。芝居をつけて、カメラで撮って、編集して流す。基本はほとんど一緒だから、まずはテレビドラマで頑張りなさい」と言われました。テレビドラマをつくっているうちに絶対に映画監督になれるはずだ、テレビ局は狭き門だけれど、とにかく頑張って入りなさいというアドバイスをされたのです。

当時の就職活動は、今のように三年生から動くことはなくて、四年生の八月二〇日が解禁日でした。この日に「よっしゃ！」という感じでテレビ局を受けようと思ったのですが、折悪しくもバッティングしてしまった。ちょうどラグビー日本代表がアメリカ遠征とオーストラリア遠征に行くことになっていたのですが、そのメンバーに選ばれてしまったんです。これは名誉なことです。就活に行くかどうするか悩んだのですが、思わずラグビーのほうを選んでいました。やっぱり日本代表の桜のジャージを着ることができるし、心のどこかに「自分が映画監督になんてなれるわけないや」という気持ちがあったのでしょう。映画監督にチャレンジすることから逃げる気持ちもあったのか、日本代表の遠征に行ってしまったわけです。

遠征から帰って来たら、もうテレビ局の就活は終わってしまっています。さて、就職はどうしよう。

せめて映画に関わることができる企業に就職したいと、富士写真フィルムを選びました。富士写真フィルムは映画のフィルムをつくっている会社で、とてもいい会社です。技術系は百何人も採用しますが、事務系は二十数名程度で、ここなら絶対に部長になれると思って志望し、採用してもらいました。

卒業してからは、ラグビーとは一切縁を切りました。あの時の慶應ラグビー部のほとんどが、社会人になってからラグビーをやめましたね。なぜかというと、卒業する頃にはみんないやになってしまっていたからです。

ＴＢＳ入社。とにかく入ったが勝ち

本社が西麻布にある富士写真フィルムに入社したのですが、働きながら、いろいろと考えました。嫌になったラグビーはもうやめた。幼稚舎の中川先生に言われた「一生好きで好きでたまらない仕事」については、見つけた。見つけたのはいいけれど、結局そこまで進もうとしなかった。一体自分はどうするのだろうと、いろいろ悩んだわけです。そこで、決めたのが、もう一回やろうということ。もう一回やってみてダメだったら、諦めようと思い、いろいろと調べました。

すると、ＴＢＳの採用条件は、年齢が二五歳まで、そして四年制大学卒業の二点でした。これはおそらく今も変わっていないと思います。だから二五歳までなら、どこの会社で働いていても、新卒として採用してもらえるわけです。ＴＢＳの同期にはソニーから来た人もいるし、銀行出身の人もいました。そこで富士写真フィルムのある西麻布からＴＢＳのある赤坂まで受けに行きました。かっこわるいので

すが、富士写真フィルムには黙って行ったわけです。どうせ受からないだろうと思っていましたから。

受けに行ったところ、今回は三万人の応募があり、採用は五〇人ですと言われました。六〇〇倍です。これは難しいな、やばいなと思いながら、エントリーシートには「ドラマ」と書きました。書いた後で、何かあるかもしれないから「スポーツ」とも書いておいたわけです。

この時は全員面接で、八次面接ぐらいまでありました。「おお、慶應で優勝したのはおまえじゃないか」「はい、僕です」なんて言いながら、一次・二次面接ぐらいまではうまくいったのですが、三次面接ぐらいになると、ドラマ専門の人たちがやってきまして、いろいろと聞かれるわけですよ。「きみは鴨下さんの作品はどのぐらい見たの？」とか言われて、全然わからずに、答えられませんでした。私が見ていたのは映画であって、金八先生以外のドラマは全然見ていなかったんですね。しようがなくて適当に答えたら。「君は本当にやる気があるのか」と怒られてしまいました。「ドラマを志望したのは、こういう気持ちからです」と正直に話したら、「でもドラマと映画は違うからね」と言われてしまいました。そこで落ちたと思ったんですが、何とか受かっていました。

次の面接からはスポーツで押すことにしました。みなさんも就活すると思いますが、とにかくその会社に入ったら勝ちですからね。よく聞いておいたほうがいいですよ。自分の得意なスポーツを志望にして、スポーツはこうである、選手のこういうところを描きたいなど適当なことを言いながら、うまく押し切っていきました。それはそうですよ。慶應義塾大学が初めて日本一になったメンバーの私が言うことですから、面接官も「ほう、ほう」と聞いてくれるわけです。

そうやってうまくＴＢＳに入社することができました（拍手）。ありがとうございます。これは慶應

ラグビー部のおかげだと思います。顔の広さというのもありましたが、ここではコネを使っていませんよ。自分の力で入りました。

入ったのはいいのですが、スポーツ部配属です。人事部長が「きみ、スポーツ部になったから……」と言うのを途中でさえぎって、「いや、聞いてください。実は僕はドラマをやりたいんです」と正直に言いました。人事部長からは当然、「ふざけんなよ、何を言っているんだ。おまえ、スポーツ枠で入れたんだから、ドラマがやりたいってどういうことだ」と怒られました。そこに至るまでのいきさつや気持ちを延々と話したら、「もう。頼むよ。スポーツ、どうすればいいんだよ」と。「いやあ、実を言うと、僕はスポーツだけはやりたくないんです。どうしてかというと、スポーツは選手が主役です。どこのテレビ局がやっても、試合がおもしろかったらＯＫじゃないですか。放送権をとってくるか、とってこないかの差じゃないですか」なんて偉そうなことを言ってしまいました。「そう言うなよ」と説得もされましたが、「ドラマは作り手によって大きく違う。僕をドラマに行かせてください」と懇願し続けたところ、「しょうがないなあ」と、最後にはドラマ部に行かせてくれました。みなさんもとにかく入ったら勝ちですからね（笑）。

体力勝負のＡＤ時代

いつになったら『半沢直樹』の話になるのかとお思いでしょうが、もうちょっと待ってくださいね。僕の人生もいろいろとためになると思いますよ。

こうしてＴＢＳのドラマ部に入りました。ここからがおもしろいのですが、同期は私を入れて五人。某自主映画祭で世界的な賞を取った人がひとり、もうひとりは早稲田の劇団出身の人、もうひとりも劇団出身というように、演出を本当にやってきた連中ばかりでした。「君はどこの学部出身なの？」とたずねられて、「慶應義塾大学のラグビー部です」と答えて、「学部だよ！」って怒られたりもしました。どうも、学部を聞かれると、よくラグビー部って言ってしまっていたんですね。

みんな、なぜかわからないけれど、私のことをすごいことをしそうな顔で見るんですよ。「自分なんて演出なんて何の勉強していないし、ただ勢いで入って来てしまっただけなのに、どうしてそんな顔をして見られるんだろう」と思っていたんですが、始まって一週間ぐらい経ってわかりました。ドラマは体力勝負だったんです。いや、ドラマ部だけでなく、テレビ局だからでもなく、おそらくどんな会社でもそうですよ。仕事はまず体力勝負。「才能なんかまずいらないよ」と言われましたね。「それはそうだろう？　監督であるオレがいいと思って撮ったのに、新人が『もうちょっとアップで撮ったほうがいいんじゃないですかね』なんて言ったら、むかつくだろう」と言われました。「それよりも、走って人を仕切ってくれたり、何十人もいるスタッフを仕切ってくれたり、見物客が来たら『すみません』って言ってどけてくれる、そういう本当に働くやつがほしいんだよ。だからおまえなんか最高だよ」と言われました。「ありがとうございます！」って言ってやっていました。

一方で、同期の連中は、やっぱりイメージしたものとまったく現場が違ったみたいで、いやになってやめた人もいるし、体力的についていけなくなって入院した人もいました。ひとりずついなくなって、最後には私ひとりしか残りませんでした。どうして私ひとりだけ残れたのか。ラグビー部の練習に比べ

たら、大したことはないからです。なんせ夏合宿では、四、五回救急車で運ばれましたからね。練習中に水を飲ませてくれないので、脱水症状でバタバタと倒れるわけです。そんな練習に比べれば、いつでも水は飲めるし、弁当は食べさせてもらえるし、助監督やＡＤの仕事は楽でした。ＡＤの仕事は３Ｋですごくきついとよく言われますが、ラグビーに比べれば大したことはありません。

三〇本の映画を選んで自己流勉強

「これは楽勝だ」といい気になっていたのですが、だんだんと助監督の一番下から上がって行き、三番目（サード）、二番目（セカンド）、チーフ助監督になって、まわりを仕切るようになっていきました。チーフ助監督の上がディレクターで、映画でいうと監督ですね。サードの助監督になってから二年目ぐらいの頃に、「そろそろ才能を試されるところになってきている。これはちょっとやばいかな」と思い、自分で勉強を始めました。

最初は、いろいろな有名監督の本を読んでみました。ところが、まったく何が書かれているのか、わからない。だいたいはわかっても、こんなことをやったって意味がない。じゃあ、どうしたらいいかなと思って始めたのが、イメージトレーニングです。好きな映画を三〇本選んで見ることでした。ラグビーで言うと、オールブラックス（ニュージーランド代表チーム）とワラビース（オーストラリア代表チーム）という一流の試合を見ることです。何回も見て行くうちに、自分がプレイ中にその場面に立った時、そういうプレイが自然に出てしまうことがよくあります。そんな時に小学生や中学生

のラグビーの試合は見ません。やはり超一流の試合を見ることが大事です。

それを映画にも当てはめたわけです。映画というくくりの中でも。小学生レベルからオールブラックスレベルまであるはずです。自分が好きで、しかも評価が高い映画を約三〇本選んで、もうとにかくこれを見ることにしました。新しく封切ったロードショー作品はいっさい見ないで、この三〇本だけをビデオやレーザーディスクなどでとにかく見て、テンポなどいろいろな要素を吸収していこうと思ったわけです。

SMAPとの出会い

それから七年ぐらいたって、ようやくディレクターになりました。でもひどいもので、上のディレクターには怒られ、鳴かず飛ばずの毎日でした。有名な作家の先生の台本を勝手に直して怒られたんですが、どうせいつかはやめさせられるのなら、思い切りやってやれと思って、直し続けていました。今思うと、漢字を書けなかった私が脚本を書けるようになったのは、この当時台本を直していたおかげだと思います。でも、このことでちょっと干されました。この干されていた時期に『3年B組金八先生』のプロデューサーの柳井満さんというという方から、「僕はね、君のことを見てたんだよ。結構おもしろいよね。君やらない？」と声をかけていただきました。「やります！」と言って、小山内美江子先生という有名な作家の先生のもと、仕事をさせていただきました。台本を勝手に変えて怒られたりもしましたが、すごい視聴率を獲ることができました。

『3年B組金八先生』で世間的に評価を得て、SMAPと出会ったんです。先ほどご覧いただいた動画で分かるように、私が演出したドラマや映画にはSMAPのメンバーがたくさん出演しています。いわばSMAPのみなさんに気にいられ何本もやるようになったのです。そうして六年間ぐらい、気づかないうちにSMAP以外のドラマや映画はまったくやっていない状態でした。

でも今思うと、とてもよかったんです。彼らや彼らのスタッフから、いろいろなことを教えてもらったし、何がいいって、予算がつく。人気のある彼らが出演するので、絶対に当たらなければいけないので、予算がたっぷりつくのです。『華麗なる一族』なんて、普通のドラマの倍ぐらいの予算がつきました。そのかわり絶対に当てなければいけないというプレッシャーがある。『南極大陸』もそういう修羅場でつくっていたわけです。でもね、それだけ度胸がついてきます。

橋本忍先生との出会い

そして、いよいよ念願の映画を撮ることができました。みなさん、『私は貝になりたい』を見ましたか？　この現場での出会いが『半沢直樹』につながっています。それが橋本忍先生との出会いでした。

橋本忍先生は、『七人の侍』や『砂の器』『八甲田山』などの映画脚本を書いた有名脚本家です。みなさんは『七人の侍』を知っていますか？　日本映画のベスト一と言われている映画ですが、それを書いた方がまだ生きているんですよ。その橋本先生が『私は貝になりたい』の脚本を担当なさっていました。『私は貝になりたい』は、戦後間もないテレビの創成期に、フランキー堺さんが主演し、生放

送でやったドラマです。世間の方にとても評価が高く、映画化しました。当時の脚本では足りないだろうと、橋本先生は一年間かけて映画用に書き直してくださいました。

橋本先生と出会った頃は、よく怒られました　撮影中も、編集中もです。しかし最後にはほめてもらいました。「君はよく頑張った。なかなかよかったぞ。映画監督というのは四五歳から七〇歳ぐらいまでが勝負だ。みんな、その間に名作をつくっている。どの監督もそうだ。二〇歳代から三〇歳代前半でいいものをつくったやつは、だいたい四〇歳になると終わってしまうから。黒澤監督も四五歳で『七人の侍』をつくって、そこから一気に行ったわけだから、君もこれからが勝負だ」とおっしゃいました。

そして「とにかくその時に守ることが二つある。まず、伝えることは短くする」と。みなさんも、これから仕事をするときに覚えておくといいです。企画書にしてもだらだら書くと、だめです。短くまとめることです。「映画のワンシーンにしてもドラマのワンシーンにしてもなるべく短くする。でも、どうしても短くできないときはどうするか。黒澤監督はどうしていたと思いますか?」と聞かれました。

黒澤監督は、同じシーンを一〇〇回ぐらいリハーサルさせ、稽古させることで有名でした。普通、せいぜい一〇回ですよ。そう聞かれた私は、「それは役に入り込ませるためでしょう?」と言ったのですが、「俺もそう思ったんだけど、違うんだよ。黒澤さんに聞いたら、そのシーンを一秒でもいいから短くするためだそうだ」と橋本先生はおっしゃいました。五〇回目と一〇〇回目では、役者さんのセリフの入り具合がまったく違うので、三秒違うそうです。「そんなに短くすることが大切ですか?」と聞いたら、先生は「そうなんだよな。英語のスピードと日本語のスピードではすごく違って、英語のほうが速い。だから邦画が洋画に負けるのは、絶対にテンポなんだ。日本語だとだらだらするし、遅くなる。だから

昔の監督は速くするために、一生懸命に工夫したんだよ。洋画に負けないように」とおっしゃいました。昔の日本映画を見てください。テンポが速いから。三船敏郎さんなんか早口で、何を言ってるか、わからないですよ。でも雰囲気で伝わるんですよね。そして全員の喋り方が速いので、すごくコンパクトにできあがります。三時間かかる映画を二時間半にしているんですよ。ですから、見ている客も飽きません。「君、とにかく短くすることを覚えなさい！」と言われました。

橋本先生の守るべきことの二つ目は「脚本を三、四人で書くこと」でした。その頃には先生とちょっと仲良くなっていたので、「橋本先生は脚本家なのに、そんなことを言っていいんでしょうか？」と聞いたところ、「いや、脚本家なんてのはね、人生でいいものを書けるのはせいぜい三本だよ。それ以上は絶対に書けない。君、黒澤監督が撮った映画で好きな作品をあげてみなさい」と言われました。黒澤監督の『隠し砦の三悪人』や『用心棒』などをあげましたところ、これらの映画の脚本もみんな三、四人で書いていることが分かりました。「黒澤監督の作品でもつまらないのは、ひとりか二人でしか書いてないよ。わかるだろう？　三、四人で書くって大切なんだよ。君も脚本を書く時にどう思う？」「そうですね。確かに自分の経験したことなら堂々と書けるんですよ。でも経験してない、予測のことになると、適当になってしまいますね」「そうなんだよ。いろいろな人生を経験した人が三、四人集まって書けば、いろいろなことを堂々と書ける。ひとつのことについても、おもしろいと思う人もいれば、つまらないと思う人もいる。それをおもしろいと思った人が四人中三人いれば成功だよ。ね？こういう見方もできるし、とにかく三、四人で書きなさい」と言われまして、心に決めて、私はまたテレビの世界に戻りました。

映画が終わって、『華麗なる一族』などのドラマ作品をつくりながら、いつか『用心棒』みたいな作品をつくってみたいなと思っていました。作品をつくるときにはだいたい愛や平和などのテーマがあるんですが、『用心棒』にはテーマがないんです。三船敏郎さん扮する浪人が村に入って来ます。村の人たちが争っているのですが、その浪人はあっちについたりこっちについたり、めちゃくちゃして、最後にはあばよって去って行くだけの、九十数分の作品です。ところがこれがおもしろいんですよ。

みなさんにはよくわからないかもしれないけれど、これ、作り手としては難しいんです。テーマがないから、なんだかがさがさする。でも飽きさせないように、ワンカットワンカットに気を使い、配役やセリフの速さに気を配り、あらゆるところに細心の注意を払ってつくるのはとても難しい。それが奇跡的に成功しているのが『用心棒』という作品で、いつか私もこういう作品を作りたいと心に思っていました。

おもしろかった『半沢直樹』の原作

愛や平和といったテーマについては最後でびしっと決めればいい、いつか『用心棒』みたいな作品をテレビでもつくりたいと思っていたわけです。そんな時に、慶應義塾大学出身の池井戸潤さんの『下町ロケット』という作品を読みました。ね、『半沢直樹』に近づいてきたでしょう？

『下町ロケット』はおもしろかった。学校の先生に読めと言われて読んだ本って、たとえば主人公の家の様子を表現する時に、たかが一軒の家を書くのにそれだけの文章を使う必要はないのに、いろいろ

なことを書き連ねて、これだけの文章力があるんだぞってアピールしているでしょう？　それで話が前に進まない。私はそういう本が大嫌いでね。学校の時にそういう本ばかり読まされていたものだから、もういやになっていたんです。だけど、池井戸先生の本ではどんどん話が進んでいくんです。とにかくおもしろさを追求した作品で、でもその人の生き様がなんとなく描かれているエンターテインメント作品だったので、これはちょっと『用心棒』に似ているところがあるなと思って、アマゾンで池井戸先生の作品を全部買いました。そして片っ端から読んだんです。

でもね、今だから言えるんですが、『オレたちバブル入行組』と『オレたち花のバブル組』という『半沢直樹』シリーズの原作本は読めなかったんだよね。つまんなさそうで。なぜかというと、バブル時代に入行した銀行マンが「あの頃はよかったなあ。今はつらいけど、頑張ろう」というバブル三人組のくだらない話が書かれているのかと思ったから。放ったらかしておきました。しかし、違う作家の経済小説を読んでいたらつまらなくて、じゃあ、『オレたちバブル入行組』を読んでみるか！　と思って読み始めたところ、おもしろかったんですね。思っていたのとまったく違う内容だとわかった。最高におもしろくて、それで、すぐに原作本を全部持って、池井戸先生に会いに行ったわけです。

「オレバブシリーズの原作権ください！」と言いました。どうせどこかにもう取られているだろうなと思っていたんですが、「やりたいのかい？」と言われました。「は、だめですか？」と答えたら「福澤さんはオレの本をやりたいなんて珍しいねえ」「え、来てないですか？」「来てないよ。初めてだよ」と言われました。本が発売されてから四年ぐらい経っていましたが、言われてみれば「まあ、確かに」と思いました。なぜなら、これは絶対に当たらないと思ったんです。テレビ業界で確実に外れる作品だか

らみんな原作権を取りに来ないんだなと思いました。

テレビでは視聴率がすべて

外れるだろうなと私も思ったのですが、とにかく原作権をもらいました。

ここから視聴率という奥深い話になっていきます。テレビ局に勤めていますと、すべての評価のもとが視聴率です。朝九時にテレビ局のマーケティング担当から全社員に、全テレビ番組の視聴率がメールで送られて来ます。シビアですよ。どんなに評価が高くても、視聴率が取れないと、だめなんです。これはしようがないですよね。ひとつの作品につまらないと思う人とおもしろいと思う人がいると思います。だから評価が難しい　本当に最も公正な評価が視聴率になってしまうんですよ。だから、視聴率がすべてになってしまうのはしようがないんです。見る人によって違うから。すごくいい作品だと思っていたのに、あの俳優が嫌いだと思った瞬間につまらなくなったりするでしょう?

ただ、テレビ局は視聴率をとるためになるべくむなしい努力をするわけです。たとえばひとつの企画が通ります。編成というところがテレビ局の心臓部です。編成部というのはどの番組を何月にやるかなどをすべて決めるところで、そこでテレビ局の番組表がつくられていきます。企画が通って、「いい作品をつくるぞ!」と思った瞬間、「視聴率を取るぞ!」という考え方になるわけですよ。「いい作品をつくる」と「視聴率を取る」――このふたつは同じだと思うかもしれません。でも明らかに違います。

テレビドラマの視聴率というのは、皆さんとはまったく関係なくつくられています。というのは、

テレビドラマを見ている八〇％が大人の女性なのです。テレビ業界ではＦ２、Ｆ３というんですね。三五歳から五〇歳、五〇歳以上の女性が、ドラマの視聴者の八割を占めているんです。ですからそこに嫌われると一巻の終わりです。そこに好かれるために、どんなことをするか。まずＮＨＫや雑誌などで行われている好感度調査の結果を見て、誰がこのＦ３、Ｆ４に好感度を持たれているか、調べまくる。毎週出て来る好感度ランキングを見て、キャスティングを選んでいくわけです。「Ａという役は、本当はイイダさんにやってほしいと思ったんだけれど、イイダさんは好感度が低いしなあ。ニシムラさんはヘタだけど、好感度はすごく上がって来ているから、ニシムラさんにしちゃおう」となることもあるわけです。それは視聴率を取るためです。本来、作品のことを考えれば、イイダさんにすればいいのに、ニシムラさんにすることも多いのです。

あとは作品の内容です。女性にはたいへんに失礼ですが、わかりやすい作品にします。企業ものは絶対にダメ。政治ものもダメ。何がいいかと言うと、刑事もの、恋愛もの、難病もの。そういう作品ばかりです。そういう作品はわかりやすいし、確かに今までの例では視聴率が高いんですよ。

そんな傾向の中、『半沢直樹』はというと、恋愛なし、銀行もの、企業もの、お金の話です。見た人はお分かりだと思いますが、「裁量臨店」なんて絶対に分かりにくいし、女性には絶対にわからない。私は企画を出しましたが、マーケティング部から「絶対に女性は見ない」という結論が出て、企画は通りませんでした。そりゃあそう、絶対に通らないと思います。「ジャイ、ちょっといらっしゃい」と女性の編成ウーマンにも呼ばれて、「これは絶対に女性は見ないから、違うものにしたほうがいいわよ」とアドバイスされました。でも内心では、「じゃあ、おまえが選ぶテレビドラマが当たっているのか。

絶対に当たってないよな」と思っていました。でもなかなかうまくいかず、待っていました。

そしていろいろな話をしました。「僕はね、従来のテレビドラマの作り方はもう嫌なんだ」とまず言いました。視聴率を取るために、みんな、いろいろなへんなことをするんです。たとえば、まず一回目にどれだけのキャスティングをそろえるかが大切になっています。放送第一回目に視聴率を獲らないとそのあとずるずる下がる傾向がありますので、一回目で数字を取りたいわけです。そのためにいろいろな有名な役者を使うわけです。有名な役者を出すためには、その役者さんのスケジュールを抑えなければなりません。その人たちの生活の保護もしなければならない。いろいろとあるわけです。主役だったらしようがないですが、脇役の人にまでかなりの金額のお金を払うのは馬鹿みたいだと思っていました。

テレビドラマには、あなたの役目は終了と、途中でいなくなる人が絶対にいます。しかし、その役者さんの事務所と最後まで出演させますと約束をしてしまったので、出さなくてはいけないことがあります。すると、そのためにひどいことが起こります。みなさんはおそらく気がついていないと思います。この回にこの人は絶対にいらないのに、出さなくてはいけない。「この回にこの人はいらないでしょう?」「でも出さなくてはいけないんです」「わかったよ!」というケンカをよくしました。「どうするんだよ」「事務所に怒られちゃいます」というケンカの後にはとんでもないシーンをつくることもあります。

たとえば、私がコジマさんのことをすごく慕っている内容のテレビドラマだとしましょう。でもある日、私は「オレはコジマを許さない。仲良くなって近づいて行って、殺そうと思ってたんだよ」という

話をハヤカワさんに対してします。こういう話はおもしろいでしょう？　「本当はコジマさんのことを憎んでいて殺そうと思っていたわけ？」……そこまではいいんです。ここで、ヤマモトさんを絶対にこの回に出さなくてはいけないことになりました。話の流れ上、この回にヤマモトさんはいらないんだけれど、出さなくてはいけないので、ハヤカワさんがヤマモトさんに「実は福澤さんはコジマをぶっ殺したいと思っているらしいよ」「え？　オレもそう思ってたよ。あの人ってさ……」というように、そのシーンをいかにも大切なシーンのように撮って入れると、視聴者の方はごまかされますが、実はこのシーンはいらないんです。だってお客さんはすでに知っているんですよ。こんな伝言ゲームみたいなものがあって、この人を出しましたって事務所のご機嫌をとるわけです。視聴者のことはまったく考えない長いシーンをつくったりして、時間稼ぎをして、そういうのが中盤ぐらいから増えていくんです。

自分は、もうそういう作り方はしたくない。だから『半沢直樹』をとにかくやらせてくれ、それなりのキャスティングを集めるからと話したわけです。編成に大変申し訳ないことを言ったんですが、視聴率を取らない逆の作り方をしたい、おもしろいものを作りたいと宣言しました。それでもなかなか通らなかったのですが、いろいろな応援があり、ようやく企画が通ったわけです。

『半沢直樹』のキャスティング

『半沢直樹』でどういうキャスティングをしたかというと、みなさんもご存じの通り、堺雅人さんと香川照之さんです。これは、橋本先生の教え通り、とにかく早口で喋れる人にしました（笑）。役者を

やったことがある人はわかると思いますが、速く、的確に、滑舌よく話せて、途中もちゃんと泣けて、涙が出るような芝居ができる人というのはそうはいません。役者さんは頭がよくなければだめ。暗記力が必要です。『半沢直樹』の最後の土下座のシーンは三〇ページあったんですからね。それを全部覚え切って、完璧な演技を何回もする堺雅人さんは天才肌です。香川さんもそう。速い。人の一・三倍ぐらいの速度で話します。堺さんも一・三倍。ですから、あの二人のシーンに大したレベルでない役者が入ると、二人のスピードに圧倒されて、もう何も喋れなくなる役者さんがたくさんいらっしゃいました。それだけこの二人の芝居のレベルはすごいのです　後は、オネエの黒崎ですよ。これは編成から、オネエは女性が嫌うからダメだと言われたのですが、「これがオネエじゃなかったら、どこがおもしろいんだ、絶対オネエでいく！」と思い、オネエでも文句を言わせないように、日本の芸能界でも最高峰の歌舞伎から連れて来たわけです。歌舞伎役者なら文句言わないだろうと思ったら、確かに文句が出ませんでしたね。

そういう感じで集めまして、あとは脚本です。超一流な脚本家を使うところを、あえて二流の人を使いました。将来確実に超一流になるだろう今は二流の作家です。超一流になる前に三流、二流と段階を進んでいくわけですから　その二流ぐらいのレベルにある脚本家を捕まえたわけです

テレビドラマや映画の世界では脚本家が強いんです。著作権というすごい権利があるから。私もひどい目に遭ったことがあります。ある原作があって、一流の方に脚本を書いてもらったことがあります。原作のまま書いてくれればいいのに、「私、できるでしょう？」とばかりに、自分が考えた新しいキャラクターをつくっちゃって、どうでもいいような芝居をつくる人が多いんです。結局、私が書き直して、

ケンカになったりして、ひどい目にあうことがよくあるんですよ。あるいは、脚本家が書いた脚本の決定稿と、それとは別の私が書いた裏の決定稿の二冊を準備して、脚本家にはその人が書いた決定稿を渡しておき、撮影は裏の決定稿に基づいて進めていき、最後の最後で「すみませんでした」と謝ったりもします。そうしないともう撮影が間に合わない。そういうくだらないことがよく起こるんです。

ですから、『半沢直樹』は若い将来確実に超一流になる二流脚本家二人と私と、三人で書きました。とにかく自分主導でやりたかったので、まず私が書いて、「これ、どうだ？」と言うと、「いいですねー」って言ってくれるような脚本家を集めたんですよ。「おまえ、へったくそだね。半沢直樹がそんなことするわけないだろう」って言えば、「ああ、すみません、わかりました」ってすぐに書き直してくれるような二人です。普通なら一流を集めるのですが、あえて二流を集めて、三人でああだこうだと言いながら書いていったわけです。

誰も予想しなかった『半沢直樹』の高視聴率

脚本ができ、撮影も始まったわけですが、次は世間の評価になります。他のテレビ局がどう思っているかが分かる瞬間があるわけです。

放送の二、三週間前に全テレビ番組の編成表が出て来ます。その時に、他のテレビ局が『半沢直樹』をどう思っているかが一発で分かるわけです。『南極大陸』や『華麗なる一族』のような作品の時には全局あげてつぶしにくるんです。なぜかというと、放送一回目で視聴率をどんと取られると、後は

延々と取られてしまうから。ですから、『華麗なる一族』の第一回目の時は、テレビ朝日が映画版『相棒』で、日本テレビが『行列のできる法律相談所　二時間スペシャル』、ＮＨＫもすごい内容の『ＮＨＫスペシャル』でした。がんじがらめの包囲網を敷かれてやるんです。『南極大陸』の時もそうでした。それでも頑張って視聴率を取って行くわけです。

じゃあ、『半沢直樹』はどうだろう、みんなはどう思っているんだろうと思ってみたら、どこの局もスペシャル番組を打ってこなかった。テレビ朝日は普通の映画、日テレも普通の『行列のできる法律相談所』が一時間、フジテレビもＮＨＫも普通。要するに、どうせつぶれるから、この番組に対抗するためにお金をかけるのはやめようと思われたんですね。全局から、そう判断されたんです。

もうとても悲しかったですよ。でも、スタッフやキャストの前で「視聴率はいらない、女性が見なくても結構です。ただ、おもしろい作品をつくろう」と言い切ったわけです。ただ、唯一、この番組をやって意義があるところはある。今のサラリーマンは日曜日がいやなんですよ。「また明日は月曜日、会社か」と思うと、憂鬱でたまらなくなる。そういう男性サラリーマンや仕事をする男性の方々に「倍返しだ！」とすかっとして、次の日に仕事に行ってもらおう、それだけは守ろうとみんなに言いました。料理で言うなら、精一杯のおいしい料理をつくって、食べてもらいましょう。女性が見なくてもいいじゃないですか。男性が見たら、ついてきますよ。お客さんたちにすかっとしてもらえる、いいドラマをつくりましょうと言って始めました。今、偉そうなこと言っていますけれど、当たったから言えることですね。

放送が始まったら、視聴率がどんどん上がって。信じられないぐらい上がって、びっくりしてしまい

ました。でもなにが一番びっくりしたって、女性が見たことですよ。私たちがなんと女性に対して上から目線だったことかと思い知りました。だって、こういう話をしたら見るでしょう、こういうセリフなら見るでしょう、恋愛じゃないと見ないでしょうと、偉そうなことを思っていたわけですから。ちっともそんなことはなかった。本当に女性は分からないですよね。女性にどーっと見ていただいたおかげで、その後に男性がついて来て、一気に行ったという結末です。

それから『ルーズヴェルト・ゲーム』というドラマを、ある事情があって、急遽つくらなくてはいけなくなりました。これも「視聴率なんか狙わない！」と偉そうに言ったんですよ。「女性が見なくて結構！」と言いながら、でも女性が見てくれるかもしれないと思っていたんです。でもまったく女性が見てくれなかった。本当に女性はよく分かりません（笑）。

学生のみなさんにわかっていただきたいのは、人生はそんなものだということです。つくりたいと思った気持ちが大切だし、運もあるけれど、成功する時は、あまり儲けをあまり考えないときですね。儲けを考えた時には失敗する。視聴率はいらないけど、いいものを作ったと言い切った時には、成功できました。『半沢直樹』もそうだったし、『ルーズヴェルト・ゲーム』も『半沢直樹』ほどはいきませんでしたが、近年ではとてもいい数字で、特に野球が盛んな大阪や名古屋、広島、福岡ではとてもいい数字をとらせていただきました。

ここで仕事の話は終わらせていただきたいと思います。

プライドを持って打ち込める仕事を見つけよう

最後に、説教じみたことを言います。

特にこのごろ、ＴＢＳに入って来る新人たちは「僕にはこういう才能がありません」とよく言います。「ドラマをやりたいと思わなかったのか？」と聞くと、「やりたいと思いましたが、自分にはそういう才能がないので」と言う若者がとても多いんですね。どうしてこういう判断をしてしまうのか、私にはよく分かりません。

ひとつ、分かって来たことは、あなたたちの頭の中に才能があるかないかは誰にもわからないということです。これは本当ですよ。もう不思議なもので、親も、先生も、自分さえも分からない。ある土俵に乗って、この才能を試される時が来ないと、あるかどうかが分からないんです。だから、「自分には才能がない」というへんな判断を勝手にしないほうがいいと思います。

そのいい例が私です。ラグビーしかやっていないラグビー馬鹿だったのに、慶應義塾大学を卒業して、ＴＢＳに入りました。自分で言うのもなんだけれど、やりたいという信念で入って、どうにかディレクター・映画監督になれたのは、ちょっと才能があったということです。僕がＴＢＳに入った時には、誰もディレクターなんかやるとは思っていなかったはず。全員が、ＡＤをうまくやって、途中でどこかに異動するだろうと思っていたはずです。それが、才能があったわけです。だから、みんなも何かやりたい仕事がある、でも恥ずかしくて言えないといった気持ちがあったら、どの道であっても、ずっと自分を信じて進んで行ったほうがいいと思います。

仕事はお金じゃないからね。会社に入って給料が高いというのは大切なことだけれど、給料が高くて嬉しいのは二〇代、三〇代まで。四〇代、五〇代になってくると、その仕事をやっていて生き生きしているかしていないかで、人生が決まって来る。そして、最後、世の中に名前が残るか。残ればいいというわけではないけれど、世のため、人のためになるような仕事をしている人はやはり尊敬されるし、まわりに人が集まるものです。

みなさんがどんな仕事をしたいかは分かりませんが、大切なプライドを持ってできる仕事を持つことはとても大切だし、今でも遅くないから、何か選んでほしいなと思っております。今の親御さん世代はよく分からないけれど、親に何か言われても、絶対に聞かないほうがいいですよ。うちの親だって、「あなたがまさか映画監督になるなんて」って言っているぐらいですから、絶対に親には分からない。先生にも分からない。自分がやりたいと思った道を突き進んでいただきたいなと思います。それで何か悩んだ時には、今日のこの話を思い出してください。何回も諦めたんです。最後の最後にやってみようと思ってＴＢＳを受けに行って、どうにかなったという男のことを思い出してください。学生時代、こういう講演があっても絶対に聞きにこなかったような男が、今、教壇に立って講演をしているわけですから。不思議でしょうがありません。世の中は変わったなと思いますが、そういうこともありえるわけです。みなさんには、給料は関係ないから、プライドをもってできる仕事を見つけて頑張っていただきたいなと思います。ありがとうございました。